

特集にあたって

福田正人*

「病気や症状はなぜ治療するのか？」と、ある時から医学生教育でそう投げかけるようになった。医学生は病気や症状の治療を当然と思っているが、医療で何を目指すかは患者と医療者で一致しているとは限らないからである。——本特集の執筆を依頼するときに紹介した背景である。この問いに、精神疾患の当事者や他診療科の医師は、次のように答えてくださった。

「精神医療においては『治療が成功したか』ではなく、『本人の意思が尊重されたか』が真に問われるべきアウトカムである」（山田論文）、「医療におけるアウトカムとエンドポイントは、単なる測定対象ではなく、価値観と社会性を含んだ概念である」（矢吹論文）、「PRO (patient-reported outcome) の日常診療へ統合は、患者が自分の声を継続的に届ける仕組みを医療のなかに制度化する取り組みであり、まさに患者中心の医療の根幹をなすものである」（堀江論文）。

では、そうした取り組みは、どうすれば進められるだろう。

『手段の目的化』は批判的に語られることが多いが、共同創造の本質は、異なる立場の人々が対話しながら新しい価値を生み出すことにある。今後の精神医療のアウトカムづくりの共同創造に大いに期待したい」（山田論文）、「精神医療では、個人の生活に根ざした目標設定が必要であり、その測定方法も個別化されるべきである。患者と医療者がともに『何を目指すか』をすり合わせる過程こそが、アウトカムを定義する最も重要な営みである」（矢吹論文）、「それぞれの治療のゴールを日常診療の中で模索する営みのなかで、PRO は医療と生活、客観と主観の間に橋をかける実践である。その意味において、精神医学はまさに PRO と最も親和性の高い領域の一つである」と考える」（堀江論文）。

これらは、「精神医療の最終目的であるアウトカムはどうあるべきか?」「現在用いられているエンドポイントはそのアウトカムをどの程度反映できているか?」という本特集の趣旨に向けて、精神医療の専門職ではない方々から寄せられた本質的な期待

* 群馬大学名誉教授/本誌編集委員

である。その期待に応えて、精神医療のさまざまな分野におけるアウトカムとエンドポイントについてお考えをまとめていただくことができた。

難解なテーマと聞こえてしまうだろうか。しかしこのテーマは、「精神医療は何がどうなることを目指すのか?」「現在の精神医療についての指標はそれをどのくらい反映できているか?」という、臨床に密着した基本である。読者の方々にとって、本特集の多彩な論文が、精神医療の基本をあらためて考える契機となることを希望している。